

33カ国リレー通信



ブラジル

República Federativa do Brasil

知られざる「鳥居大国 ブラジル」

深沢 正雪

昨年のサッカーW杯では日本から数百人も報道陣がやってきた。にも拘わらず誰も注目しなかったが、実に不思議な現象として、近年の「鳥居の激増」がある。

もちろん「ブラジルで神道の普及が急速に進んでいる」わけではなく、肝心のお社は相変わらず十指に満たない。

ニッケイ新聞記者が地方取材するたびに鳥居を訪ね探した結果、少なくとも101基が見つかっており、その大半が今世紀に入ってから建立された。日本以外では最多ではないかと推測している。

この「お社なき鳥居」というあり方の原型は、南米一の日本人街サンパウロ市リベルダーデ区にあるガルボン・ブエノ街の大鳥居だ。1974年にサンパウロ市条例で「東洋街」(Bairro Oriental)として観光地区指定したことから、「何かシンボルになるものを」とリベルダーデ商工会が頭をひねって考えた結果、「じゃあ、鳥居とスズラン灯を作ろうじゃないか」となった。

そして、観光地区の目玉が「熱田神宮のそれをモデルにした鳥居」となり、その周りにスズラン灯が設置され、セットになった。スズランの花をモチーフにしたこの街灯は、著者は日本では見たことがない。だが、なぜかブラジル

では「日本式」と認識されている不思議なデザインだ。

「なぜ熱田神宮の鳥居だったのか」と、当時のリベルダーデ商工会理事に尋ねたが、「さあ、とくに理由はありませんね。たまたま手元に写真があったからでしょうか」という気の抜けた回答だった。

ただし、その理事は「当時は、お社を作らずに鳥居だけ作ることにし、けっこう反発もあったんですよ」と感慨深げに振りかえった。実際、1997年以前に建立されたのは19基しかない。しかも、その多くはお社がある正当なものだった。

逆に言えば、残り82基は98年以降に建てられた。では、いったい98年以降に急増した理由はなんなのだろうか。



ガルボン・ブエノ街の鳥居とスズラン灯

1998年以降に急増した理由

急増の背景として言えるのは、リベルダーデ区で開催される4月の釈尊聖誕祭、7月の七夕祭り、

12月初めの東洋祭り、大晦日の餅つきなどの日系行事がサンパウロ市の風物詩として定着していることだ。大手ブラジルメディアが毎年それを報道するたびに鳥居も映し出してきた。その繰り返しで一般社会には「東洋街=日本=鳥居」とのイメージがすでに固まっていた。

それに加え、“移民の団塊世代”の寿命が大きく関係する。1926～35年までの10年間の移住者を合計すると約13万2千人もいる。戦前戦後を通じたブラジル移民数25万人の半分以上が、この10年間に集中している訳だ。

この団塊世代の家長の特徴は、日清・日露戦争の勝利の余韻が強い明治後期に人格形成した点だ。つまり、伝統的な価値観が強い人が多く、この世代が「社なき鳥居」に批判的だった。

この家長世代は1900年前後の生まれで、移住期に30歳前後、移民全盛期と呼ばれる78年の70年祭の時に70代後半、その後、80年代にどんどん亡くなり、残りが「魔の90年代」に余命を終えた。

一時は南米最大の農協と呼ばれたコチア産業組合中央会、日系二番手だった南伯産業中央会の相次ぐ解散清算が94年、日系唯一の金融機関だった南米銀行も98年に身

売りという魔の時代となった。

ところが、それと反比例するように水面下で起きていた現象が、この鳥居の増加だった。

1年間で47基の建立ラッシュ

私がブラジルに来た1992年、日系団体「御三家」と呼ばれる文協（ブラジル日本文化福祉協会）、援協（サンパウロ日伯援護協会）、県連（ブラジル日本都道府県人会連合会）のどこも、例外なく日本語で会議をしていた。現在では文協は100%ポルトガル語になり、地方の多くの日系団体も同様だ。会長および役員が「団塊ジュニア、二世、三世世代になったからだ。

98年の移民90周年からは、移民100周年を目指す新しい勢いも生まれていた。口うるさい団塊の親世代という重石がなくなると同時に、大きな目標が目の前にぶら下がった。その過程で、「社なき鳥居」＝宗教的な存在ではない「日系のシンボル」が一気に定着したようだ。

移民90周年の98年以降だけで68基が建立された。なかでもブラジル移民百周年の2008年だけで全体の半分近い47基が立てられる「鳥居ラッシュ」を迎えた。

日本国内で08年に何基建てられたか知らないが、瞬間最大風速的にはそれを超えたのではないか。

しかも同年建立されたものの多くは、地元市役所が費用負担して公費で作った。100周年を記念して一般市民の憩いの場として日本庭園を造り、その「モニュメント」として鳥居を据えたという構図だ。

このような鳥居の分布は日系人のそれと見事に重なる。最多は日系人口の7割を占めるサンパウロ州で69基、次が一割を占めるパラ

ナ州で14基、計8州1連邦直轄区に散在している。

現地民俗化した日本文化

今まで見た中で最も感慨深かった鳥居の姿は、移民百周年の年にサンパウロ市のサンバチーム「ウニードス・ダ・ビラ・マリア」がカーニバルのパレードで行進した山車だった。

サンバはもともと、最も保守的な大衆（黒人）によって育まれてきた伝統芸能だ。バルガス独裁政権は1937年に政令で「サンバチームはパレードで歴史的、教訓的、愛国的なテーマをドラマ化して表現しなければならない」と定めた。植民地から出発したブラジルが、独自の国民文化やアイデンティティを形成する過程でサンバは国民音楽として広められた。

そのようにナショナリズムを昂揚する返す刀で、枢軸三国からの移民は迫害された。日本語学校閉鎖、邦字紙停刊、日本移民が隣町に行くのに警察の許可が必要になった。公の場で日本語をしゃべっただけで、留置場に叩きこまれた暗黒の時代だ。ブラジル政府にとって“まつろわぬ民”だったかもしれない。

戦前移民の大半は、お金を貯めて数年で錦衣帰国するつもりだっ



たから、「敗戦＝帰るべき故郷の喪失」を認めることは感情的に容易なことではなかった。

それゆえ終戦直後に勝ち負け紛争を起こし、二十余人の尊い命が犠牲になり、一般社会からの信用を失う痛手を負った。この頃に思春期を迎えた二世丸ごと一世代が、日本語や日本文化は「野蛮で狂信的」であると離れていった悲しい結末を招いた。

この二世層は、口うるさい団塊親世代に反発を感じて、かつて日系社会から遠ざかっていたが、2000年頃から先祖返りのように日系団体に戻るようになった。

ブラジル国民の民俗文化、魂そのものであるカーニバルは、かつて日本移民とは対極的な存在だった。そこで日本移民が扱われ、そのシンボルとして鳥居が行進するということは、ブラジル国家を形成する民族要素として民衆レベル



カーニバルに現れた鳥居

で受け入れられたことに他ならない。勝ち負け紛争という民族的トラウマを、ホスト社会が丸ごとに受け入れてくれたことを意味したように見え、著者にとっては、「ブラジルの深い寛容性ここに極まれり」の図であった。

鎮座する見えない誇り

とはいえ、ここまで来るのに戦後70年の歳月がかかっている。1950年代、日系社会は再出発のための団結を必要としていた。戦中に強制解散させられた日本人街が、53年の日本映画上映館シネテロイ設立が端緒となって、60年代に再形成しはじめた。日系社会

が自信を取りもどし始めた70年代、同映画館脇に建立されたのが、ガルボン・ブエノ街の鳥居だった。

ここから日系社会再生が始まったと言っている。宗教色を抜きつつも、神々しさを残し、なおかつ目立つという難しい役割を果たし、結果的に日系人のシンボルとして根付いた。

だから、あの鳥居の先にお社はないが、見えない民族団結の誇りがましましている。夕暮れ時のスズラン灯はどこか、戦中戦後に“まつろわぬ民”として無念を抱えたまま亡くなった者たちの魂のようにもみえる。

日系人が無意識に「ブラジルの

鳥居」に込めた意図は、悲しいナショナリズムの記憶を超えたエスニック意識のシンボルといえないだろうか。日系人の活躍と共に鳥居は増え続け、多文化共存社会の表象として世界へ発信され続けるだろう。

(ふかさわ まさゆき ニッケイ新聞編集長)

ラテンアメリカ参考図書案内



『神戸移住センターから見た日本とブラジル』

黒田 公男 神戸新聞総合出版センター 2014年11月 221頁 2,500円+税
ISBN 978-4-343-00815-2

関東大震災の2年後1925年に海外移住が国策とされ、28年に神戸に移住者保護のための施設「国立移民収容所」が開設された。海外への移住者はここで1週間余滞在しオリエンテーリング、健康検査や予防接種などの出発前の準備を行った。この収容所は後に名称を変えて大戦が始まった41年にいったん閉鎖されたが、戦後の移住開始で52年に再開され64年に現在の名称になった。71年に神戸港から最後の移民船が出て93年には国策としての海外移住は終わったが、神戸市に払い下げられたセンターを海外移住の歴史を遺すべく2009年に改装が終わって「神戸市立海外移住と文化の交流センター」として開館、中に「海外移住ミュージアム」も設けられ、運営は一般財団法人日伯協会が行っている。

本書は、ブラジル移住の黎明期から、1926年神戸に日伯協会が誕生し最初の大事業として移民収容所建設を行ったことから、戦前の同所の使われ方、ブラジル移住を描いた石川達三の小説『蒼氓』の背景、戦後のブラジル移住再開の舞台裏を明かし、ブラジルでの日本移民の受け入れ、移民船の歴史、ブラジルでの日本人移住者の活躍や移住ミュージアムの意図など、神戸新聞勤務時代から移民研究を続けてきて、長く移住センターに関わってきた著者（日伯協会理事）ならではの記録である。

[桜井 敏浩]